

令和 4 年 6 月 25 日現在

機関番号：32622

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K10620

研究課題名(和文) 終末期における訪問看護プロセスの可視化 疾患・年齢・家族形態別の特徴

研究課題名(英文) Visualization of end-of-life home nursing care

研究代表者

村田 加奈子 (Murata, Kanako)

昭和大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：70381465

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：訪問看護を利用して在宅看取りとなった「がん」療養者335人と「非がん」療養者136人に対して、終末期に訪問看護師がどのような関わりや看護を提供していたのかを、療養者と時期別にその特徴を明らかにした。本研究では、訪問看護記録についてテキストマイニング法を用いて分析を行った。その結果、「がん」療養者には疼痛に関する看護ケアが多く、「本人」や「希望」という特徴も看護記録抽出された。一方「非がん」療養者では、訪問看護師は呼吸ケアなど生命にかかわる看護ケアと、陰部洗浄や摘便などの清潔・排泄ケアを多く実施していることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、終末期における訪問看護のケア内容をがん療養者と非がん療養者に分けて分析することで、今後の在宅看取り推進に向けた訪問看護の質向上に寄与することができる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify the characteristics of the relationship and nursing care provided by home care nurses to "cancer" and "non-cancer" home-visit nursing users at the end of life based on home care nursing records. The home-visit nursing records (including home-visit nursing plans and reports) of 471 home-visit nursing users who received end-of-life care at home between June 2013 and September 2017 were included in the analysis.

As a result, it became clear from the home nursing records that some "cancer" patients maintained their ADLs until close to death, such as going to the toilet even two weeks before death. Nursing care related to pain was often provided. The "non-cancer" patients were often bedridden one month prior to death, so they received life-related nursing care such as respiratory care, and cleanliness and excretory care such as pubic washing and defecation.

研究分野：在宅看護学

キーワード：終末期 訪問看護

### 1. 研究開始当初の背景

我が国では、誰もが可能な限り住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるように、地域包括ケアシステムの構築が喫緊の課題となっている。その中で、地域で暮らす療養者の生活と疾病の両方を支える訪問看護師への期待は大きい。訪問看護師が訪問看護利用者の終末期において、実際にどのような看護を提供しているのかを明らかにすることは、地域で暮らす高齢者が自分らしい最期を迎えることに貢献できると考える。

在宅療養のがん患者、特に末期がん患者は、40歳以上であれば介護保険が利用できる上に訪問看護が医療保険で受けられるなど、支援制度が整いつつある。訪問看護においても、患者の終末期における研究は数多くなされている。一方で、非がん患者の終末期における訪問看護の実態に関する研究は少なく、どのような訪問看護がなされているのか明らかにされていない。また、訪問看護師へのインタビュー調査や事例で整理した研究<sup>1)</sup>、死亡前1年間の身体機能低下のパターンとそれに伴うケア<sup>2)</sup>や死亡7日前からの調査<sup>3)</sup>はあるが、訪問看護記録から終末期におけるがん患者と非がん患者の訪問看護の特徴を明らかにした研究はほとんどない。

### 2. 研究の目的

本研究では訪問看護記録から、終末期における高齢の「がん」療養者と「非がん」療養者に対して、訪問看護師がどのような関わりや看護を提供していたのかを、死亡前の時期別にその特徴を明らかにすることを目的とした。

### 3. 研究の方法

2013年6月から2017年9月までに在宅看取りとなった訪問看護利用者471人の訪問看護記録(訪問看護計画書・報告書を含む)を分析対象とした。分析項目は、性別、年齢、主たる疾患名、訪問日、死亡日、訪問看護記録(記述内容)で、主たる疾患を「がん」と「非がん」に分類し、死亡日からその前42日間を「死亡14日前から死亡日まで」、「死亡28日前から15日前まで」、「死亡42日前から29日前まで」の3つの時期に分類して分析した。

分析方法は各項目の記述統計を算出し、訪問看護記録(記述内容)についてはText Mining Studio 6.2(NTTデータ数理システム)によるテキストマイニング法を用いて単語頻度分析、係り受け頻度分析、補完類似度を用いた特徴語抽出、ことばネットワーク分析を行った。

倫理的配慮として、昭和大学保健医療学部人を対象とする研究等に関する倫理委員会の承認を得て実施した。

### 4. 研究成果

分析対象となった471人のうち「がん」療養者は335人で、男性199人(男性対象者272人中73.2%)、女性136人(女性対象者199人中68.3%)であった。「非がん」療養者は82人で、男性73人(男性対象者272人中26.8%)、女性136人(女性対象者199人中31.7%)であった。死亡時の平均年齢は「がん」療養者で男性75.6±10.6歳、女性73.1±12.9歳、「非がん」療養者で男性86.0±7.6歳、女性90.4±6.0歳であった。

#### (1) 単語頻度分析の結果(表1)

訪問看護記録の単語頻度では、「がん」療養者と「非がん」療養者ともに3つの時期に関わりなく、「家族」、「本人」、「良い」という単語が一番多い結果であった。

表1 「がん」療養者と「非がん」療養者の訪問看護記録における単語頻度

順位	死亡14日前から死亡日まで				死亡28日前から15日前まで				死亡42日前から29日前まで					
	がん		非がん		がん		非がん		がん		非がん			
	単語	頻度	単語	頻度	単語	頻度	単語	頻度	単語	頻度	単語	頻度		
1	家族	2170	家族	865	1	家族	829	家族	355	1	家族	577	家族	213
2	本人	1034	良い	416	2	本人	496	良い	187	2	良い	329	良い	112
3	良い	1026	本人	322	3	良い	467	本人	148	3	本人	323	本人	97
4	伝える	827	訪問	292	4	言う	279	言う	131	4	言う	239	訪問時	84
5	連絡	738	説明	283	5	様子	274	訪問時	118	5	痛み	213	伝える	75
6	訪問	721	伝える	280	6	痛み	268	伝える	112	6	病状観察	210	見る	75
7	説明	721	連絡	279	7	訪問時	265	訪問	101	7	様子	193	出る	73
8	様子	716	言う	276	8	病状観察	263	食べる	101	8	伝える	190	話す	66
9	言う	696	呼吸	269	9	伝える	260	食事	98	9	訪問	184	食事	66
10	状態	573	様子	265	10	訪問	258	様子	96	10	出る	171	言う	64

#### (2) 係り受け頻度分析の結果(表2)

訪問看護記録における係り受け頻度では、「死亡14日前から死亡日まで」では「がん」療養者と「非がん」療養者で「呼吸 止まる」や「声 かける」、家族に関する係り受け頻度が高く、



まで」では、「がん」療養者については痛みに関する言葉との共起関係が見られ、家族については病院、家、先生、呼吸、変化、心配という言葉との共起関係が見られた。「死亡 28 日前から 15 日前まで」では、「がん」療養者については「死亡 42 日前から 29 日前まで」と同様に、痛みに関する言葉との共起関係が見られた。家族については病院、家、入院、困難という言葉との共起関係が見られた。また病状観察、介護保険、療養相談という言葉に共起関係が見られた。「死亡 14 日前から死亡日まで」では、「がん」療養者については「死亡 42 日前から 29 日前まで」と「死亡 28 日前から 15 日前まで」と同様に、痛みに関する言葉との共起関係が見られた。家族については、不安、安心、大変など多くの言葉との共起関係が見られた。

在宅看取りとなった日から 42 日間遡った訪問看護記録から、「がん」療養者と「非がん」療養者で訪問看護内容の特徴に違いがあることが明らかとなった。「がん」療養者は死亡 2 週間前でもトイレに行くなど、ADL が死亡間近まで保たれている場合があることがわかった。また、「がん」療養者は疼痛に関する看護ケアが多く、訪問看護記録に「本人」や「希望」という特徴があったことから、訪問看護師は疼痛管理を行いながら療養者本人の希望や精神的ケアを行っていた。一方「非がん」療養者では、死亡日の 28 日前から療養者本人に声かけを行い、意識レベルを確認する内容が多かったことから、「非がん」療養者は死亡の 1 か月前から寝たきりなどの状態にあることが多く、呼吸ケアなど生命にかかわる看護ケアと、陰部洗浄や摘便などの清潔・排泄ケアが多くなされていた。死亡時の平均年齢による差も考えられるが、「がん」と「非がん」療養者へのケア内容に特徴に違いがみられたことから、今後は看護ケアの量についても分析を行い、「がん」と「非がん」療養者の終末期に必要な訪問看護を明らかにし、療養者と家族が望む最期を迎えることができる体制を整えていく必要がある。

#### 引用文献

- 1) 佐藤泉, 山本則子他 (2011): 終末期の訪問看護における時期別の期間と訪問頻度の違い  
がんとがん以外の事例の比較, 日本看護科学会誌, 31(1), 68-76.
- 2) Lunney J. R., Lynn J., et al. (2003): Patterns of functional decline at the end of  
life, JAMA, 289(18), 2387-2392.
- 3) 若林和枝, 湯沢八江 (2011): 在宅がん患者と非がん患者の看取り時に行われた訪問看護の提  
供実態 死亡 7 日前より死亡日までに提供された訪問看護時間および回数からの一考察, 日本  
在宅ケア学会誌, 15(1), 62-69.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 村田加奈子、富田真佐子、藤澤真沙子、鈴木浩子、西田幸典、野島あけみ
2. 発表標題 終末期における「がん」療養者と「非がん」療養者への訪問看護の特徴～訪問看護記録からの分析～
3. 学会等名 第9回日本在宅看護学会学術集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	富田 真佐子  (Tomita Masako)  (10433608)	昭和大学・保健医療学部・教授   (32622)	
研究分担者	鈴木 浩子  (Suzuki Hiroko)  (40468822)	昭和大学・保健医療学部・教授   (32622)	
研究分担者	西田 幸典  (Nishida Yukinori)  (50464714)	神奈川工科大学・保健医療学部・教授   (32714)	
研究分担者	入江 慎治  (Irie Shinji)  (90433838)	神奈川工科大学・保健医療学部・教授   (32714)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	藤澤 真沙子  (Fujisawa Masako)  (70840081)	昭和大学・保健医療学部・兼任講師     (32622)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関